

第20回「文芸思潮」エッセイ賞 発表

第20回
文芸思潮
エッセイ賞

二〇二五年度第20回「文芸思潮」エッセイ賞は、アメリカ、ヨーロッパなど国外からも含め、総数一九六篇の御応募をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。昨年よりかなり多い応募数で、内容がそれに比例するか懸念もありましたが、蓋を開けてみると、優れた作品、佳い作品が目白押しで、全体に向上し、選考はどれも篩い落とすかで苦渋に満ちたものとなりました。昨年以上に優秀賞・奨励賞以上の作品が薈き合い、たいへんハイ・レベルなコンテストとなりました。年齢層も十代から九十代まで幅広く寄せられ、それぞれ貴重な体験や社会批評を込めた、豊かな内容でした。

例年の通り、まず予選担当による第三次までの予選選考が行なわれ、さらに選出された最終作品を対象に、水木亮、都築隆広、五十嵐勉三人の選考委員によって七月三十日山梨県甲府市越山美芸ギャラリーにおいて最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀賞・優秀賞作品を発表させていただきます。以後奨励賞も誌上に掲載させていただく予定です。

「文芸思潮」エッセイ賞

最優秀賞

「繋がった円―地中海の夏の思い出―」

松岡 環 (スペイン・アリカンテ州)

「セキレイ」

黒川喜代志 (北海道札幌市)

「津島中学校吹奏楽部、あの子たちは今」

長瀬清正 (東京都練馬区)

優秀賞

「束の間の平和」竹中水前 (東京都江東区)

「帰り船」 鈴木是和 (東京都大田区)

「父とすいとん」小倉一純 (神奈川県川崎市)

「その一言が言えない」

宮尾美明 (愛知県愛西市)

「常盤平団地」山田まさ子 (東京都国立市)

「制限の記憶」 荻屋紀子 (栃木県鹿沼市)

「眉村ゼミの事」三刀月ユキ (京都府京都市)

「『お姉ちゃん』と呼んで」

田中美晴 (大阪府豊中市)

「あの時が過ぎて」木村敬子 (滋賀県栗東市)

「赤い旗とジャガリコ」

武藤蓑子 (東京都多摩市)

奨励賞

「希望」 姉齒浩一 (東京都八王子市)

「花と造花に見る美しさと不変」

剣城かえで (埼玉県さいたま市)

「夢日記」 網白まこと (神奈川県川崎市)

「子どもの発達と愛着形成」秋谷進 (神奈川県横浜市)

「リアルを知らない」風桜じゅん子 (栃木県小山市)

「綿毛みたいな」 跡部佐知 (秋田県秋田市)

「鳩忌」 林 英二 (北海道苫小牧市)

「百日草」 中村郁恵 (北海道札幌市)

「江戸戯作者の抵抗文学と志を継ぐもの」

七松奈津夫 (神奈川県横浜浜市)

「サルサに溶けて」丹波蔵堂 (愛知県江南市)

「一〇年前のラブレターたちへ」

須山琴乃 (神奈川県横須賀市)

「明美という名の男」新垣景和 (沖縄県那覇市)

「樟脳の香り」 佐伯厚子 (大阪府富田林市)

「ラムネ」 山田 牧 (東京都杉並区)

奨励賞

「『宗教二世』という偏見」

吉川真理花（兵庫県神戸市）

「真冬のソフトクリーム」

大野美子（大阪府豊中市）

「憧れの槍ヶ岳三一八〇メートル」

崔宣葉（京都府福知山市）

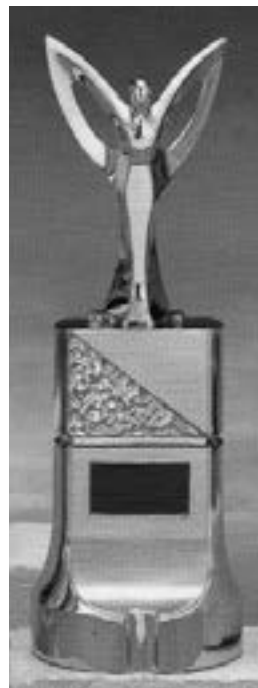
「脳梗塞からのメッセージ―ピカソの絵を通して―」

林 須磨（京都府宇治市）

「はじめての外国は、ドイツの小さな町だった」

田山野恵（東京都小金井市）

「心は火傷をしていない」古瀬節子（山形県山形市）



選評



いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ
79「流^{りゅう}謫^{たく}の島」で群像
新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売
新聞・NTTプリンテック
主催第1回インターネット
文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館
文学賞受賞

ハイレベル目白押し

エッセイ賞の応募者数は一昨年一七三、昨年一三六と減少傾向にあったが、今年は一九六と復活的増加を示した。昨年は数が減りながら実質的にレベルが上がり、優秀作、奨励賞候補はメジロ押しで篩^{ふる}い落とすのに難儀した記憶があったが、今年は数が増えた分、駄作も増えて実質的レベルは下がるのではないかと懸念していたが、蓋を開けてみたら、そんな懸念は吹っ飛んでしまった。

まず予選の段階で最終選考に残す作品の選出に苦労した。どれもいい作品で落とすにくかったからである。普通最終候補作は四〇篇から五〇篇、それさえ多くて他の選考委員

から「もっと少なくしてくれ」と苦情が出るのだが、今年はどうしても残して選考委員に読んでほしいと願う作品が多かった。結局最終選考に六〇篇が残ることになってしまった。

次にそれぞれに点数を付けていくのだが、ふつうは最優秀作品・当選は5点、優秀賞レベルは4点台、奨励賞レベルは3点台、佳作レベルは2点台、入選レベル1点台となる。たいてい奨励賞は、これまでの平均3点以上から考えると、二〇篇から三〇篇に落ち着くのだが、私が3点以上を付けたのは、なんと五二篇あった。4点以上に絞られる優秀賞レベルは、二三篇あった。5点満点の最優秀作品も三作品あった。

これが意味するのは、どういうことか。いい作品が揃い、コンテスト全体が高レベルになったということだ。昨年以上に優秀作品が集まり、きわめて喜ばしい結果になったというところにほかならない。諸手をあげたい気持ちだった。むしろんこれがずっと続くわけではないし、今年だけの現象に終わるのかもしれないが、とにかくこれだけのレベルの高い作品が集まったことはこれまで賞を積み重ねてきた上での快挙と思った。

当然例年よりも、優秀賞、奨励賞の数はもちろん、佳作、入選の数も増えることになった。二〇回の節目をこのような形で迎えられたことは実にうれしいことだった。

最優秀賞の三作は、題材が特に光っていた。「繋がった円——地中海の夏の思い出——」の筆者松岡環氏は、現在スペイン在住だが、その職業も魅力的で「手工芸品露天商」とある。自分で作ったアクセサリーを露店で売って生計を立てている生き方も光っている。ストーリーは、地中海のビーチで売ったネックレスが、それを買った女性の生き方を大きく変えて、現在の小さなイルカの保護活動に繋がっている——ネックレスのサメの歯が契機になって、海洋生物に興味を持ち、絶滅しかけているイルカの保護活動にまで発展した、という流れだ。そのサメの歯のネックレスを、彼女は今も首にかけていると、母親が言う。自分の小さな行為と話が、一人の人間を動かし、絶滅生物保護の大きな行為にまで発展しているその繋がりのドラマが、感動を深めている。我々の細かな日常が意外に大きなものに繋がっているそのスケールの広がりがすばらしかった。

長瀬清正氏の「津島中学校吹奏楽部、あの子たちは今」は、音楽の新鮮さが地震の被害と対峙している。東日本大震災の現場に足を置いて、以前吹奏楽を教えたその追懐の中に、地震と原発の大災害の破壊を浮かび上がらせつつ、吹奏楽という音楽の本質的な力を湧き起こしてくる——災害と音楽の歓喜の両面から人生の深さを感じさせてくれる交響感覚に揺さぶられた。またこの文章は、音楽の本質的な魅力も匂わせている。これは指揮者としての稀有な職業と、遠

くまで足を運んで指導する愛情によってこそ描くことのできた世界だろう。と同時に、地震の破壊被害と悲慘とを未来の希望に繋げる道筋が、音楽を通してここに湧き出してくるところに、この作品のさわやかさがある。いい作品と思った。

黒川喜代志氏の「セキレイ」は、題材をうまく切り取って鮮やかに造形した作品で、エッセイとしてのまとまりは秀逸である。空気銃に魅せられる少年の冒険心や、戦後でもない頃の戦地帰りの元兵士、そして覚えた空気銃の腕前でセキレイを撃ち殺し、その死骸に群れるセキレイたちの輪舞など、映像も鮮明で、よく配置されている。時代の殺伐な余韻も、少年たちの銃を扱う不穏を孕んだ心理も、綾織りを深くしている。セキレイがこういう集団行動をとるかどくかは別にして、鋭く心に残る作品になっている。抜群の切れ味を持っていた。

優秀賞作品は一〇篇に上ったが、どれも力のある作品で、新人はインパクトも強く、常連の書き手はそれぞれ以前よりも向上した技量を見せる充実ぶりだった。

「東の間の平和」(竹中水前)はシリアでプリヂスントンタイヤを販売していたときの海外経験を軸にしている。当時の内戦状況やそれによる悪路の状態がタイヤの頻繁なパンクを通して生き生きと伝わってくる。またその国の「少しはどこしをしろ」という迫り方をうまくいなしながら解

決する行動も当時の日本企業の海外での活躍の源泉に触れる気がして、重い実感があつた。さらにこの行動を裏打ちする考え方が表れている箇所に深く感動した。「数限りなく『タイヤの死に様』を見てきた私には、それらが道路や使い方に問題があるということは一目でわかった。成仏せず死んでいるタイヤたちに向かつて思わず手を合わせた」

——この自社製品とタイヤそのものの深い愛情こそが日本製品の本質であり、海外発展の原動力であったことを教えられた。海外での苦勞が輝いて伝えられている意味深いエッセイだった。ただタイトルが漠然としているので、シリアという言葉を入れるなど、工夫してほしかった。

「あの時が過ぎて」(木村敬子)もタイトルに「能登地震」を入れてもらうとものとわかりやすくなっただろう。能登地震のことを伝えるエッセイは初めて読ませてもらったが、この作品は被害の生々しさが迫ってくるだけでなく、漆芸作家の父親の残した工芸技術を、バトンを渡されるように受け継ぐとするその姿勢に未来が輝いている。そこに、いっそうの被害の深さがある。地震を乗り越えるということとはこういうことかという、積極的な姿勢に光があった。それが作品に厚みを加えていた。

「その一言が言えない」の筆者宮尾美明氏は常連で、すでに何回も優秀賞になっている技量の持ち主だが、ふつうはこれだけ重ねると種切れになったり、文章がぬるくなった

りするものだが、それをまったく感じさせずに、むしろ題材の扱い方など文章技術は向上している。人物の描き方も鮮やかになっていて、賞を取るために生活のすべてを懸ける女性の絵描きなど臨場感がある。そしてその人間が落選して、もっと動機も薄くして出品した自分の作品が賞をもらう、嫉妬と屈辱の芸術の世界の一面がよく露出している。この心理の切り取り方にまた一段と洗練された技量を感じられた。タイトルも適っている。

「帰り船」(鈴木是和)も、できればタイトルに「テニアン」を入れてほしかった。テニアンはマリアナ諸島の中でも原爆を積んだB29が発進した飛行基地で、特別な島だからである。米軍はその島を占領するにも、激戦を重ね、父親がそこで戦死されたことにはさらに深い因果がある。捕虜名簿にも記載されていない無念さはよく表れているが、テニアン占領の激闘とさらにその後の米軍のテニアンの航空基地の使用状況を書き加えていけば、さらに重みのある作品になっただろう。

こうした戦争を題材とした作品について付言すれば、数年前まではかなり数が多かったように記憶しているが、今年はこの作品ともう一つくらいだった。戦争体験は今後もいっそう風化していく傾向を辿ることは否めないが、やはり伝え残さなければならぬ重要な領域なので、ぜひ聞き書きでもいいので、今のうちにこの領域に光を当てて残し

ておいてほしい。

「父とすいとん」の小倉一純氏は珍しい題材を父親の好きだったすいとんを通して見事に造形した。すいとんを自身の手でこだわり作って味わうその嗜好のなかに、太平洋戦争空襲下の学生時代の父親の苦学の思い出が滲んでいると同時に、親切に世話をしてくれたアパートの大家の娘への愛惜が潜んでいる。そしてそれと同時に、その親切で純朴な年上の女性が太宰治に愛を寄せ心中した事実が描かれて、驚嘆の展開を見せる。私は有名な人物、有名な事件に依存する手法を好まないが、これは山崎富栄という女性の別な日常的側面を筆者の父親の恋心のなかに捉えることによって、すいとんにこだわる父親との繋がりの中にその存在を鮮やかにしている。危うい側面を持ちながらももしっかり描出して、技量を上げたことが確認された。

残りの優秀賞作品は他の選考委員が触れると思うので、私としてはあと一作だけ述べるに留まらせていただきたい。「制限の記憶」（荊谷紀子）は文章がいい。これはふだんから鍛錬し、しかも継続してないと紡ぎ出せない緊密な文体を有している。文章の密度は優秀賞の中ではこの作品が最も高い質を見せている。右乳房全摘出という手術を受けての病院の生活から見えてくる「日常」が、一つの遊離感を通して鮮明に見えてくるところに、筆者の独特の哲学がある。鉄筋病棟を制限と捉え、その制限の中に鮮明化さ

れる別な世界がみずみずしい。そしてこの非日常の新しい世界が、「オウム真理教の元代表死刑囚ら七人の死刑執行」と交錯する捉え方が、日常の破壊の深さを視かせると同時に、危うさをも喚起してくる。死刑執行と交錯させることは、日常を根底から覆すインパクトを持つていると同時に、この世界の重要な秘密を抉る危うさを孕む。もし死刑執行がオウム真理教の死刑囚ではなく、他の死刑囚だったらこの提示は成り立つのか、構成の細かな点では揺るぎがないとは言えず、放り出したままのような未解決感も払拭できない。非日常というよりも反日常を炙り出して点では、深さが窺え、変わった余韻を残す作品だった。

奨励賞レベルは実に多くて困った。いい話、残すべき話がたくさんある上に、文章について感心する作品もあり、注目すべき見方、尊い体験など、残して文芸思潮誌上に載せたい作品がメジロ押し。頭を抱えた。できるだけ多く奨励賞にしたが、とても足りず、結局佳作に泣いてもらって極力掲載して読者に読んでもらうことで許してもらおうしかなかった。

そのなかでも特に触れておきたい奨励賞作品をいくつか挙げておきたい。

特に文章の魅力に富んでいたものが二作あった。網代まこと氏の「夢日記」と剣城かえで氏の「花と造花に見る美しさと不変」である。

「夢日記」の文章は詩的な紡ぎの流れが自然で、祖父や祖母との過去の時間も、災害の体験も、また白という色も死や骨の色に繋げて、この世界のはかない根を匂わせる。夢の叙述でありながら、生きている流れの底を浚って現在の足場の危うさに突き付ける。その微妙な吐息の旋律に生を確かに穿つスリリングな魅力がある。美しい醗酵を醸す文章には魅了された。

もう一つ文章において注目したのは剣城かえで氏の「花と造花に見る美しさと不変」である。ふつう造花は花の偽物とか代用物として低く見なされがちなのに、筆者は造花にもその美しさを発見する。「花が持つ美しさは、花の代わりとして咲いている造花でも同じだと思える。私は物にも魂が宿ると思っている。造花には造花の使命があり、花と同じ役割と佇まいがある。きっと造花には花に引けを取らない美しさがあるだろうし、造花は造花なのであって、決して花の偽物ではないことを表している」「美しいと感じる、心が震える時に、自分が見て感じているものが不滅の中に輝きを持つものであるかを見つけることが出来るようにと思う。肉体や物という器を超えた不朽が自分の心と精神に触れて琴を奏する時の喜び。その音色をいつでも思いつくようにしたい」——花や美を通して、命への深い愛情を基盤にして掘り下げられる哲学の妙がここには息づいている。

命の愛おしさに基づいてハムスターという短命の動物に触れた作品に「綿毛みたいな」（跡部佐知）がある。寿命二、三年というハムスターのはかないかわいらしさを温かいまなざしで包んで命の尊さや出会いと別れの稀有さを浮かび上がらせた文章には心洗われるものを覚えた。

「一〇年前のラブレターたちへ」（須山琴乃）は、タイトルの通り、中学時代に付き合っていたボーイフレンドとのラブレターを通して生きることと愛することのかけがえのなさあらためて見直す新鮮なアプローチを提出していた。現在の筆者が社会の荒波のなかでうつ病になり休職中であることが、いっそう過去の絆を鮮やかに浮かび上がらせる。心を通わせ合ったそれが光を帯びて、生きる力と希望を持たせてくれる。過去の愛情の素直な吐露が生きる勇氣へ繋がっていることに、輝きがあった。

姉菌浩一氏の「希望」は設備管理という目立たないが重要な現代の社会生活の中で縁の下で貢献者の職業についての感懷に、深い味があった。電気設備、ボイラー、冷凍機、空調、水廻りなど、例えば病院でこのライフラインが断たれた場合は命に関わる重大事故に結びつくが、普段は事故がなくて当たり前の陰の仕事に、意義や意味をしっかりと見出している思考に、感動があった。「結局は、虚無に向かつて突き進めば進むほど、すべてに豊穡の実をつけるものだ。それは乾ききった砂がいくらでも水分を吸い込むように、

あるいは絶対的な真空が周りのすべてを吸い込み始めるように、生きることが幻であることを実感することが、逆にこの世界をダイナミックで動的なものとして我々の前に生き返らせる」という認識は、深い真理への到達になっている。そしてそこに生徒が受け止めた希望を繋げているところに、震撼させるものがあつた。

「鳩忌」(林英二) も不器用で純朴な、何をやってもうまくいかないKという友人に対する深い追懐が心を温めてくれた。そのKがいつも余興でやっていた鳩の物まねを、鳩を見るたびに思い出す心の繋がりが、残酷な人生の一面を突き抜けて、ぬくもりを届けてくれた。

論理的な文章の中にも、重要な、学ぶべき内容を有した作品があつた。「子供の発達と愛着形成」(秋谷進) は、幼児の頼るべき存在の有無がいかにその後の人生に影響するかをわかりやすく、理論的に示していて、深く納得させられた。幼児期に「この人たちは僕を守ってくれるのだ」という愛着形成があるかないかで、生き方や社会性が大きく変わってくることをこれほど明確に示した文章は初めて読んだ。たくさんの人にこの重要な事実を知らせたい。頼るべき愛情の有無が、これほど人生を左右するものであるかあらためて思い知らされ、人間の根本を突き付けられた気がした。

反骨精神の系譜を江戸時代から遡って示した「江戸戯作

佳作



「花の都の悪い奴と人情」

斎藤 望

「異空間」

城殿悦生

「その時が来ました」

斎藤はな絵

「白い十字架を持つ毒婦」

菱川町子

「淋しさを埋めるために」

心静賀

「プリズンの一夜」

祖峰 傾

「死にたいマン」

辻 紗樹

「湯たんぽのような温もり」

佐高 源

「人間はこの世界の住人ではなく旅人である」 tool.k

「はじめてのおつかい」

安部としき

「おっぱいへの思い入れとは？」

香湖さざり

「私を生きる」

神山洋平

「坂本龍馬は『株式会社と複式簿記』を知っていたのか」

「外灘今昔譚」

久井孝則

「親が子に伝えるもの」

びわしゅ

「先祖を辿る」

風樹 茂

「軍盔」

田中 修

「咳と生きる」

高島 緑

「南 俊貴」

南 俊貴

「『ここで生きる』と決めて。」 深山彌生

「原爆画家と開襟シャツ」 木内是壽

「『ドロボー』だー」 富登千恵子

「パールとA-Iラブそして狐」 はなはな

「原風景」 朝日のか

「父と釣り竿」 渡瀬千華

「一枚の絵画」 山崎こうせい

「異物の孤独と沈黙の救い」 十文字斎

「ヒカリの蝶」 久我晃平

「父親百態」 はるひ

「不便を楽しむ」 松尾なおゆき

「ゼロ番地の男たち」 桜藤 伸

「手話通訳士資格消除が受理されて」 横山典子

「半分休み」 明石弘貴

「人生において、確率は収束する」 其扇よひら

「弱虫な小鹿、絶望を吼える」 立竹落花

「投影」 村松佐保

「男尊女卑に感謝する」 さちえ

「時空を飛ぶパピヨン」 植田郁子

「なんだかなあと思うこと」 ドンゴロスの飼い主

「強迫性障害と二十年付き合って」 室伏三鶴

「私は私を生きる」 木岡愛子

「父の二つの名前」 米山佳寿美

「その秋の空、深い碧」 るぼ

「納税は美德？」 さとうともえ

「着物の人になったら人生が楽しくなった」 岡本りょうえ

「パトカーよ、お前は」 西島雅博

「老けない男」 藤原章生

「私を導くことば」 おにぎり

「何者にもなれなかった私は」 misato

「ダディとの思い出」 圓川 潮

「忘れてしまえ」 色透ふう

「Pinkとブルー」 江倉リユ

「ローファーは脱いで」 ひまり

「可哀想な奴は誰か」 高倉香月

「姉と私は被爆二世」 石橋いづみ

者の抵抗文学と志を継ぐもの」(七松奈津夫)は、筆鋒を研ぐことを怠ってはならないことをあらためて肝に銘じてくるものだった。反権力、反体制の立場からの痛烈な批判はもともと命懸けでやるものであり、躊躇ってはならない権力との切り結びであることを痛快なまでに教えてくれた。現代のマスコミの骨抜きにされた批判精神の欠如を嘆くと同時に、覚悟を持って批判する態度のゆるぎなさを求められ、姿勢を正された。

最後にどうしても触れておきたかったのは、「リアルを知らない」(風桜じゅん子)である。インターネットやスマホ、SNSなどで便利さときれいさに生活が覆われてしまっている現在、これでもいいのかという警告はきわめて説得力があった。「人々が全てをインターネットに頼ってしまうことにより、リアルにモノを見たり、感じたりすることがなくなってしまう」ことに鋭い警鐘を鳴らしている。

さらに「リアルを知らない」ということは、おそらく、みんなが思っている以上に恐ろしいことである」と真の危機に気づいている。このままで行くと仮想世界がいつそう拡大し、みなその中で「リアルを知らない」まま生きるようになる。「リアルを知ることの大切さを、さまざまな情報で溢れる今の時代でこそ、多くの人に知ってほしい」という結語が凜と響いてくる。筆者は十六歳の高校生。若い世代のなかに本来の重要な問題に気がつき憂えている人がい

ることに、頼もしさと希望を覚えずにはいられなかった。総じて今回のエッセイ賞は豊穡で、レベルも上がり、宝船のような賑わいだった。惜しくも佳作になった作品の中にも、掲載したいものがたくさんあった。極力載せる方向でがんばりたいが、次回もこのようなたわやかな実りが見られるよう大いに期待している。



みずき りょう

作家・劇作家・演出家
1942 北朝鮮生まれ
99 小説「祝祭」で第16回織田作之助賞受賞
2006 小説「お見合いツアー」で第49回農民文学賞受賞
戯曲も多数ある

充実したエッセイを読む楽しみ

水木 亮

今回エッセイを読んで感じたのは、生活の中から感じ取ったリアルな作品、また毎年応募されている方の、学びから修得した質的に高められた作品など、読んでいて楽しく教えられることが多かったことである。

改めて日本のシニアの文学愛好者や高齢者の文章表現の場として、文芸誌「文芸思潮」の存在はとても貴重だと感

入選

- 「ノアガーデン『エリザベス』」 栗山佳子
- 「荒川河川敷の一騎打ち」 太田 悠
- 「震災は我が魂に及び」 酒井恵三
- 「新聞配達」 田中浩司
- 「情報分析」 松浪 丞
- 「花に逢う人」 西尾 吉
- 「住民運動と介護 中村亮嗣の奮闘記」 黒岡 實
- 「私の減量作戦」 田賀せいし
- 「ハッピーワイフ ハッピーライフ」 団周五郎
- 「家」 伊槻 散
- 「左利きと四女の彼氏」 芹澤志津夫
- 「私の存在意義、言葉を紡ぐこと」 伊藤裕子
- 「ハチ公と日本人」 長堀 篤
- 「最後の『お引越』」 九条之子
- 「悲しみの中のラブソング」 秋葉みのり
- 「どうなる時代劇」 林 純一
- 「『時代』と共に歩む教えの脇道」 平野靖雄
- 「汗と涙の異国文化交流記」 星那木蓮
- 「卒寿の波乱を乗り越えて」 村越千代子
- 「十周年結婚記念日」 茂木麻子



- 「心の渇き」 和泉勇希
- 「医師の人間性と医療の可能性」 新時代造
- 「湖畔で胸タッチ」 ふきのとう
- 「下井草のアパート」 東方健太郎
- 「金閣寺という、技巧の仮面」 北川 聖
- 「梅雨明けの科学者のエッセイ」 森 竣祐
- 「対馬丸を辿る数奇な運命」 琴森 戀
- 「人道的競争の時代へ」 神崎淳子
- 「理想と現実」 蒼樹ほのお
- 「初めて死にたくなったときのことを思い出した」 凍可宙夜
- 「ダメ人間正義説」 安井 健
- 「今おばさんに伝えたいこと」 古池真矢
- 「犬のじゅうきち」 澤谷雄太
- 「記録と記憶」 吉澤奈々
- 「嗜虐心」 小松正樹
- 「悔恨」 澤 佳男
- 「和倉温泉の思い出 関根歌さんのことなど」 わかさきまろのぶ

じた。

今回も高齢者が元気になるような作品が多く見受けられた。また精神を病んだ人にも少なからず励ましを与えるような作品も見受けられ、その意味でも「文芸思潮」の役割は大きい。

これからも、高齢者が残りの時間を元気に生きてゆけるようになり、また心的な悩みを持つ仲間が元気づけられ、前向きに生きていけるような、作品が多く寄せられることを期待している。「文芸思潮」はそれを応援している。私の心に残った作品を紹介したい。

最優秀賞

「セキレイ」黒川喜代志

高校生の頃、仲間と空気銃で遊んでいて、戦争帰りの男性と会い、彼の確かな射撃に驚いた。それに刺激されてさらに空気銃で獲物探しをしていて、バレイリーナのような美しいセキレイに出会ったが、友人がそれを撃ち殺した。そのセキレイの遺骸に多くのセキレイが黄金の塊のように集まり、火柱のように空高く消えた。動物たちの切ない想いと自分の切ない思いが重なり、特に、セキレイたちの群れの動きには筆者の無念の思いが込められている、忘れられない事件であつたろう。撃ち落されたセキレイの命を、私たちも再びここに感じることができると、よい作品だと思う。

「繋がった円——地中海の夏の思い出——」松岡環

障害のある一九歳の青年との触れ合いを描いた。ベランダから手を振る筆者を、電車から確認する青年との温かい触れ合いが読ませる。

「眉村ゼミの事」三日月ユキ

学んだゼミの魅力を書いた。ゼミの師匠を支えた妻は亡くなったが、「ずっとその家の中に気配があり続ける」という、師匠の言葉に惹かれる。

「制限の記憶」荻屋紀子

乳がんでの入院の体験を書いた。制限のある日常から退院し、改めて新しく生きてゆく決意が力強い。

奨励賞

「鳩忌」林英二

何事にも不器用な友人Kと、見栄を張って生きようとした自分の生きざまを重ね、年月を経てその自死したKを思う気持ちが良く伝わってくる。

「宗教二世」という偏見」吉川真理花

宗教二世ということで、生じてくるさまざまな偏見を正直に書いている。貴重な意見でこれに共感する。

「サルサに溶けて」丹波蔵堂

楽しいサルサの思い出が書かれている。ユーモアがあり楽しく読ませる。

「心は火傷をしていない」古瀬節子

子供の入学式に参加の父親からの電話から始まる、そ

露天商の自分が作って売った首飾りが、若い女性の運命を変えた。その女性は首飾りがきっかけで海洋保護センターで働くことになり、存続の危ぶまれる海の生き物パキタの保護活動をしているという。その首飾りは彼女のお守りとなっていた。それは日頃の自分の希望と重なっていた。共感できる作品である。

優秀賞

「常盤平団地」山田まさ子

底辺に生きる庶民の思いを、団地生活を通じて描いた。現在の老人の直面する現実を、具体的に書くことでとても参考になる。最優秀に匹敵する内容だと思う。

「その一言が言えない」宮尾美明

共に画家を目指した親友がいるが、その友は筆者が絵画の賞に入賞した時何も言わなかった。思えば筆者も共に学んだ文学仲間が受賞した時お祝いの言葉が言えなかったことを思いだした。「言えない一言」をもつ人は強い」と、かつての友に期待している。目指すものに向かって生きた人間のリアルな思いを感じる。

「お姉ちゃん」と呼んで」田中美晴

書かなくてはならない、癌を患った妹への切ない体験がよく書かれている。タイトルもよく、妹さんの供養になると思う。

「赤い旗とジャガリコ」武藤蓑子

の対応が心を打つ。タイトルもよい。

「明美という名の男」新垣景和

男性であるのに、女性のような名前を付けられたことで起こる体験を書いた。視点がユニークで面白い

「脳梗塞からのメッセーजीーピカソの絵を通して」林須磨
自らの脳梗塞の体験を書いた。具体的に、詳細に書かれていて参考になる。タイトル後半の「ピカソの絵を通して」は不要である。

佳作

「可哀想な奴は誰か」高倉香月

いじめを受けた経験。それを乗り越えて生きていく姿に共感する。

「姉と私は被爆二世」石橋いづみ

被爆の現実と、現在の原子力発電所の問題にせまった。大切な課題であると思う。

「親が子に伝えるもの」風樹 茂

死こそが親が子に伝えることができる最良の贈り物だという。その自分の覚悟の内容が読ませる。

その他に残った作品をあげておきたい。

「父の二つの名前」米山佳寿美

父の名前の由来からその背景を考えた。名づけには歴史がある。その視点がよい。

「強迫障害と二十年付き合って」室伏三鶴

貴重な体験で学ぶものが多い。

「なんだかなあと思うこと」ドンゴロスの飼い主

看護の現場で働く者の苦労話である。その現場の厳しさを改めて驚く。

「何者にもなれなかった私は」misato

何かになることは人生のゴールではなく、ありたい自分をどう育てるのが豊かな人生だと考える。人生を見つめる姿に共感する。

「ヒカリの蝶」久我晃平

精神を病みながら、その遅しく底辺を生きてゆく姿に打たれる。

人は生きている以上、いろいろな悩みがある。書くことは人の気持ちを整理し、これからいかに生きてゆくかを考えさせるよい手段である。高齢者は老いてゆく自分の身体の体操なども肉体として大事だし、脳を活性化することも大事である。そのためには書くことも有効だと思う。今回大勢の人々の作品に接し、様々な厳しい現実を学んだ。これはとても嬉しいことである。私も残りの人生の時間に活かしたいと思う。高齢者にも、悩める若者にも、遅く生きる主婦達にも、癒しになる味のある文芸として、これからも多くの作品が寄せられることを期待している。



つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ
東海大学文学部卒
2002「看板屋の恋」で第
91回文学界新人賞受賞
「狼を見る」(文芸思潮)
「ご脊属様ジャーニー」(三
田文学)他「長者屋敷の寝
られぬ座敷」(合作)で佐々
木喜善賞など 構成作家と
しても活動中

悲喜交々、 エッセイの濁流

都築隆広

エッセイ賞も二十回目。公式ホームページにてアーカイブを確認してみると、自分は七回目から選考委員の末席に加えていただいていた。投稿作の水準も国産鰻の平均価格の如く上がり続け、今や最終選考に残った作品に優劣をつけることすら困難になってきた。

何故に鰻で喻えたかはさておき、斯様な混戦を制し、今年には三作品が最優秀賞を射止める。松岡環氏の「繋がった円——地中海の夏の思い出——」は初読時、「バキタ」なる海洋生物の初耳具合から高評価をつけた。しかし再読してみると文章も冴え渡っており、円環というか、円に関する記述の奥深さにさらに惹きつけられた。一方、下読み段



エッセイ賞選考員水木亮氏の
エッセイの書き方
御注文はアジア文化社まで
1000円

階から自分が推していた作品は黒川喜代志氏の「セキレイ」である。空気銃の照準を合わせる場面での、戦争帰りの男と少年達の無骨な会話が妙に小説的でそえられる。こうした無邪気で残酷な交流の先にある文学世界が大江健三郎の「飼育」なのではないかと、想像を膨らませもした。この二作より技巧では劣るも、福島震災や原発の問題とも絡まって題材が良かったのが長瀬清正氏の「津島中学校吹奏楽部、あの子たちは今」である。ただ、指揮者である作者がこの学校を指導に訪れるペースが年一回だったため、密接だと捉えるか、遠いと感じるかは難しいところだ。それでも、音楽を始めるきっかけが小名浜の鮭鱒漁の出港式という点がユニークだった。

惜しくも優秀賞となったが、「眉村ゼミの事」(三日月ユキ)と「父とすいとん」(小倉一純)の二作にも高得点を入れた。「眉村ゼミ」はSF作家の眉村卓の追悼文であり、青春群像劇にもなっていて、読み物としても高水準だった。また、商業作家は時代に消費され、死後、忘却され易い。著名な人物であっても風化を食い止めるためには、指導者としての横顔があったことを誰かが書きとめておくべきだろう。

「父とすいとん」は推理小説めいた構成のエッセイだ。市井の人のように語られていた人物が、実は純文学界隈では名の知れた「有名人」だとわかる。世には出ていない記録

第21回 文芸思潮エッセイ賞 作品募集

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしのなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

趣旨●随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化する。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格）。

応募規定●4000字以内。極力パソコン印字で。※応募原稿は返却しないので、コピーを取り、コピーの方を送付すること。パソコン・ワープロ原稿は横長A4用紙40字×30行で印字。必ず右上を閉じること。原稿用紙形式は用いないこと。

別紙に①応募部門（2026第21回「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム④ふりがな（どちらにもふりがなを）⑤年齢・生年月日・性別⑥住所〒（必ず郵便番号を明記のこと。ないものは失格）⑦電話番号⑧職業・略歴※①～⑧でこれらが厳守されていないものは失格となる。

応募審査料●1800円を郵便為替（郵便局で購入）で同封のこと（為替には無記入・無押印）。外国からは14USドルを同封。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」エッセイ賞係

TEL03-5706-7847 FAX 03-5706-7848

E-mail bungeisc@asiawave.co.jp

賞●最優秀賞■賞状・トロフィー・賞金10万円（2名以上は7万円）

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上は2万円）

奨励賞■賞状・賞メダル 佳作・入選■賞状・記念品

選考委員●水木亮・都築隆広・五十嵐勉

締切●2026年3月31日（当日消印有効）

発表●予選通過作品発表は2026年6月25日発売の「文芸思潮」100号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終結果・最優秀作および優秀作は2026年9月25日発売の「文芸思潮」101号に発表掲載。奨励賞も順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、あなたの真の声を乗せたエッセイ作品をお寄せください。



だろうから、今後、作家研究における貴重な史料にもなりうるだろう。しかし、上記二作品は「著名人の知名度」に頼る側面があり、そこに足を引っ張られた。

常連入賞者、山田まさ子氏の「常磐平団地」も優秀賞だ。私小説作家としての成長を願っていたら、意外にも社会派作家方面でのリサーチ力が増大している。毎回、厳し目に選考していても、上位の賞をもぎ取ってゆく手腕には脱帽した。

優秀賞がまだまだある。「帰り船」（鈴木是和）は父が戦死したテニアンに慰霊ツアーに向かう話。十数年前のエッセイ賞では、戦争体験談が山程、投稿されていた。それが、すぐに親や祖父母からの伝聞となり、今や戦争エッセイ自体が激減している。今回も戦争エッセイは数える程で、大切な記憶を継承することの難しさについて改めて考えさせられた。

やはり優秀賞の「その一言が言えない」（宮尾美明）。SNSや公募賞やネット文芸の発達により、「一億総クリエーター社会」といつても過言ではない現代日本において、努力をする者と脚光を浴びる者達の明暗が描かれる。「嫉妬」や「羨望」の一言では言い表せない我々のモヤモヤを見事に言語化してくれた。

さて、「枕草子」や「徒然草」のような古典随筆が存在し続けていたとはいえ、かつては「軽い読み物」としての

印象しかなかった文芸ジャンル、エッセイ。しかし、この賞と共に広く成長し、深く成熟している。落選も当選も、投稿者には悲喜交々あったろうが、何百、何千という応募作は、一作たりとも無駄にはなっていないだろう。

何を書いてもいい、浅くても深くてもいい、だけど生半可な散文の位置にいつまでも甘んじてはいない。エッセイという濁流は荒れ狂い、大河となつてどこまで流れゆくか。これからの一観測者として、先の先まで見届けてゆきたい。

